



(自由の女神)

● 自由の肖像

大江 一道

今から二〇〇年前に起こったフランス革命は、おびただしい政治象徴をともなった歴史的^{ウエブ}事件であった。その象徴形式としてとくに多く用いられたのは、「自由の木」と「自由の女神」である。一七九〇年七月一四日の連盟祭における、マルセルユでの場合には、市の広場の交差点に設けられた「祖国の祭壇」に「自由の女神」が祀られた。

一九八〇年代のフランス革命史研究の新しい潮流は、革命の政治文化にメスを入れたことである。その第一線にあるベンシルヴェニア大学のリン・ハントは、フロイト的「家族ロマンス」の分析方法を用いて、「父(Ⅱ国王)殺し」から「兄弟愛」^{フラテルニテ}への交代、そして父の復活、に政治社会の大転換の意義を鮮かに描出した。この大転換のなかでの図像が、自由の理念のシンボルとして女性をもつて表現されたことの意味は深い。現実には女性の法的権利の確立にはいたらなかったとはいえ、フランス民衆は、ミシュレも言ったように、女性こそ最も民衆的な存在とみなして、革命の図像にさかんに女性を登場させたのであろう。民主と自由をかちとるたたかひのシンボルに、最も豊かな感性に恵まれた存在として女性を讃えることは、以後、フランスの伝統となる。ドラクロワ然り、ドーミエ然り。やがてこの「自由の女神」は、大西洋を越えてニューヨークに渡るだろう。そして、中国の青年、学生男女は、一九八九年春、天安門広場に高々とかれらの「民主の女神」像を立てたのである。国家権力がおそらく粉砕するであろうことを覚悟しつつ。

(おおえ かずみち・西洋文化史)